

ヨハネによる福音書8章1-11節 「律法と恵み」

1A 宮で教えられるイエス 7:53-8:2

2A モーセの律法による挑戦 3-6

1B 姦淫の現場で捕らえられた女 3-5

2B 地面に指で書くイエス 6

3A 罪なき者 7-9

1B 石投げを命じるイエス 7-8

2B 年長者から去っていく者たち 9

4A 救うために来られた方 10-11

本文

ヨハネによる福音書 8 章ですが、今回も、以前の学びと同じく、午前と午後の礼拝に分けて、一節ずつ見ていきたいと思えます。今朝、午前は、8 章 1-11 節を見ます。姦淫の現場で捕らえられた女に対するイエス様の言葉から、主の御心を知っていきたいと思えます。そして説教の題名は、「律法と恵み」です。神が命じておられること、律法と、恵みというのは相反しているものなのでしょうか？それとも、裏表のコインなのでしょうか？話は 7 章の最後の節から、です。

1A 宮で教えられるイエス 7:53-8:2

7:53 [人々はそれぞれ家に帰って行った。8:1 イエスはオリーブ山に行かれた。2 そして朝早く、イエスは再び宮に入られた。人々はみな、みもとに寄って来た。イエスは腰を下ろして、彼らに教え始められた。

今は、エルサレムにて仮庵の祭りがありました。そして、イエス様のなされた印、また語られた言葉によって、この方は預言者ではないのか？キリストなのかかもしれない、という言葉が飛び交いました。パリサイ派によって遣わされた下役でさえ、「7:46 これまで、あの人のように話した人はいませんでした。」と言っています。けれども、そうした肯定的な反応に対して、「いや、違う、イエスは惑わしているのだ」という否定的な反応があり、しかし、否定する反応の根拠は、間違った情報に基づくものでした。

そして祭りも終わったので、人々はそれぞれ家に帰ります。けれども、イエス様はオリーブ山に行かれました。そこで夜を過ごされます。主は、ついてこようとした弟子たちに対してかつて、「人の子には、枕するところもない。」と言われましたが、半分、野宿のようにしてオリーブ山で寝ておられたのかもしれませんが。そこで夜を過ごされて、それから朝に神殿に向かわれます。そして、イエス様は神殿の境内で、腰を下ろして教えておられます。ユダヤ教の教師は、いつもこのようにし

て教えられました。生ける水を飲みなさいと呼びかけられた時は、立ち上がられましたが、教える時は座ります。

2A モーセの律法による挑戦 3-6

祭司長たちとパリサイ人たちが、イエス様を捕えようとしていたことを思い出してください。捕えて殺そうとまで考えています。イエス様がこのように、続けてエルサレムで教えられて、人々の心が彼になびくことを非常に恐れていました。それで、次の行動に出ます。

1B 姦淫の現場で捕らえられた女 3-5

3 すると、律法学者とパリサイ人が、姦淫の場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、
4 イエスに言った。「先生、この女は姦淫の現場で捕らえられました。5 モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするよう私たちに命じています。あなたは何と言われますか。」

これまで律法学者やパリサイ派の人たちが、イエス様と言い争っていたのは、安息日の掟に関することでした。それは飽くまでも、安息日についての彼らの解釈を巡る争いです。人を癒すこと、そして床を運ぶことが、仕事をするのと彼らは解釈していたので、それを行われたイエス様に腹を立てたのです。それはあくまでも、先祖たちに言い伝えて、口伝律法に基づくものでした。けれども、ここは違います。明らかに、モーセの律法にはっきりと書いてあることです。「姦淫してはならない」というのは、十戒の中にあります。そして申命記 22 章 22 節にはこうあります。「申 22:22 夫のある女と寝ている男が見つかった場合は、その女と寝ていた男もその女も、二人とも死ななければならない。こうして、あなたはイスラエルの中からその悪い者を除き去りなさい。」

しかし、彼らがこのようにイエス様に訴えていることにおいてさえ、おかしい部分があります。「その女と寝ていた男もその女も、二人とも死ななければならない。」と言っていて、男も連れてこないといけません。ところが、いない。これが罫であったのかどうかは分かりませんが、女だけを連れてきたのは、律法を完全に守っていないということになります。

ここで、何が試されているか？というと、「律法の要求を満たすために、神の憐れみとか、恵みはどうなるのか？」ということなのです。彼らは既に、イエス様が憐れみ深い方であることを知っていたのです。イエス様のところには、取税人はいるし、元遊女にいます。そして彼らと食事までしています。ある時、パリサイ派のシモン家に不道德な女がやって来て、イエス様の足を涙で濡らし、香油をかけ、髪の毛でふき取ったことをしました。そして、彼女の罪は赦されたと宣言しました。ヨハネも福音書の冒頭で、こう言っています。「1:16-17 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」そうした、イエス様の憐れみ深い行為を見ていて、この場で、この女に対して、モーセの律法を適用するのかどうか試そうとしています。果たして、憐れみ

を示して、女に石投げをしないようにするのか？けれども、そうしたらイエスは、律法に背くことをする偽預言者ということになり、彼を捕えることができます。彼女に対して、主がどのように対応されるのでしょうか？

私たちは、主が御言葉によって命じられていることが多くあります。この姦淫もそうでしょう、古い契約だけでなく、新しい契約の中でも、イエス様は、当時のユダヤ教よりもさらに厳しいことを言われ、離婚して再婚すれば、姦淫の罪を犯していると言われました。嘘をつかないで、真実を語りなさいということ。親に従いなさいということ。偶像を避けなさいということ。これらは律法の下だけでなく、教会に対する使徒たちの教えの中にもあります。それでは、こうした命令に背くことを行った時、私たちはどうすればよいのでしょうか？神の恵みとか憐れみというのは、いやいや、離婚していいのだよ、嘘も方便というよね、そういった堅いことを言うてはいけない、偶像崇拜も、人をつまづかせてはいけないから、やっておいたほうがいいよ、ということになりますでしょうか？それも違いますね。では、恵みと神の命令というのは、どのようなつながりがあるのでしょうか？

2B 地面に指で書くイエス 6

6 彼らはイエスを告発する理由を得ようと、イエスを試みてこう言ったのであった。だが、イエスは身をかがめて、指で地面に何か書いておられた。

興味深いことをイエス様が行われています。彼らの言葉に反応せず、なんと、指で地面に何かを書かれておられます。こういった時、ヨハネの福音書では特に、意味深なことがある、何かを指しているのです。モーセの律法を彼らは持ち上げています。律法と言えば、神はイスラエルの民に、石の板に、ご自分の指で戒めを書かれたことを覚えていらっしゃいますでしょうか？「出エジプト 31:18 こうして主は、シナイ山でモーセと語り終えたとき、さとの板を二枚、すなわち神の指で書き記された石の板をモーセにお授けになった。」その姿はあたかも、主なる神ご自身が今、十戒をお書きになられているかのようです。

3A 罪なき者 7-9

1B 石投げを命じるイエス 7-8

7 しかし、彼らが問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」8 そしてイエスは、再び身をかがめて、地面に何かを書き続けられた。

ここです、イエス様が、律法と恵みの関係を明確にしておられます。モーセの律法のとおり、石を投げないといけませんが、投げることができるのは、罪なき者ということです。「姦淫をしてはならない」という命令があり、姦淫の罪を犯したら死ななければいけません。恵みに満ちたイエス様は、石を投げなさいと命じられているのです。律法に違反したことを言われるのではなく、むしろ、

律法の言うとおりにしなさいというのです。パウロも、神の恵みの福音について、こう語りました。「ロマ 3:31 それでは、私たちは信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、律法を確立することになります。」律法を確立することになるのです。ですから、先ほどの質問、「神の恵みは、神の命令に違反したことを、やっても大丈夫だよ、というものなのか？」という問いに対しては、断固として「否！」ですね。

神の恵みというものは、神の命令に違反すること、罪を犯すことに対して甘くなること、緩くなることではありません。いいえ、むしろその逆です。神の戒めが聖なるもの、正しいものであることを本当に知るからこそ、神の恵みの真意を知ることができます。律法主義に陥っていることは、律法を大事にしているようで、逆に、律法の真意に対して甘くなっています。イエス様は、人の言い伝えによって、神の戒めをないがしろにしているということも言われました。

神の福音は、律法の目的についてはっきりと知るところから、始まります。「I テモ 1:8-10 私たちは知っています。律法は、次のことを知っていて適切に用いるなら、良いものです。すなわち、律法は正しい人のためにあるのではなく、不法な者や不従順な者、不敬虔な者や罪深い者、汚れた者や俗悪な者、父を殺す者や母を殺す者、人を殺す者、淫らな者、男色をする者、人を誘拐する者、嘘をつく者、偽証する者のために、また、そのほかの健全な教えに反する行為のためにあるのです。祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、そうなのであって、私はその福音を委ねられたのです。」

イエス様は、次に「罪のない者が」と言われました。ここです、私たちが神の恵みに立つ、第一歩は、「自分自身を知る」ところから来るのです。彼らが女に石を打つというのであれば、自分自身が姦淫の罪は犯していないという前提でなければ、石打ちはできません。なぜなら、もし犯しているならば、女だけでなく自分自身も石打ちを受けなければならないからです。自分が他の罪を犯しているとみなされる人と同じように、罪があるというところに立つときに、人は神の憐れみをいただくことができます。自分自身こそが罪人で、石打ちで殺されなければいけないのに、それでも憐れみを受け、憐れみだけでなく、恵みを受けている、というところに、まことの恵みがあります。

私たちは、徹底的に、罪ある者として立っているところで、初めて神の真理の中に生きることができます。「I ヨハ 1:8-10 もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。もし罪を犯したことがないと言うなら、私たちは神を偽り者とすることになり、私たちのうちに神のことばはありません。」

2B 年長者から去っていく者たち 9

9 彼らはそれを聞くと、年長者たちから始まり、一人、また一人と去って行き、真ん中にいた女と

もに、イエスだけが残された。

非常に興味深いです。イエス様が「罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」と言われて、また地面に何かを書いておられますが、ここで彼らは、自分が姦淫の罪、また他の罪から免れているわけではないことを悟ったのでしょう。しかも、年長者から始まり、去って行ったのです。年長者ほど、自分の年月の中で、罪の自覚というものが大きかったのでしょう。イエス様が、律法のことを語られた時に、その罪というのは表面的なものではありませんでした。姦淫の罪でいうならば、先に話したように、離婚して再婚することをも姦淫を犯したことになると言われたのです。そこまで、離婚という動機の裏に、他の女への情欲が隠されていることを語られたのです。そして、思いの中の罪はどうでしょうか？イエス様はこう言われました、「マタ 5:27-28 淫してはならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。」

律法が外見のものだけでなく、実は心のことをも取り扱う霊的なものであることを知れば、自分がいかに罪深いかを悟ることになります。「ロマ 7:12-13 ですから、律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです。それでは、この良いものが、私に死をもたらしただけではないのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、罪がそれをもたらしただけです。罪は、この良いもので私に死をもたらしることによって、罪として明らかにされました。罪は戒めによって、限りなく罪深いものとなりました。」

4A 救うために来られた方 10-11

10 イエスは身を起こして、彼女に言われた。「女の人よ、彼らはどこにいますか。だれもあなたにさばきを下さなかつたのですか。」11 彼女は言った。「はい、主よ。だれも。」イエスは言われた。「わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい。これからは、決して罪を犯してはなりません。」

ここに、イエス様の恵みがあります。まず、「女の人よ」と言われています。彼女はどれだけ、「売女(ばいた)め！」など、あらゆる罵り言葉で呼ばれていたことでしょうか。事実、姦淫の罪を犯していたのですから、そう呼ばれてしかるべき女かもしれません。ところが、主は「女の人よ」と、女性に敬意を表する呼び名で呼ばれているのです。主は、私たちを見るときに、神が初めに造られたかたちをもって見てくださいます。どんなに罪にまみれていても、主はそのように見られます。

そして、「彼らはどこにいますか。だれもあなたにさばきを下さなかつたのですか。」と尋ねておられます。そう、唯一、さばくことのできる方は主イエスご自身のみです。すべての人が、神の裁きに服するのです。「ロマ 3:19 私たちは知っています。律法が言うことはみな、律法の下にある者たちに対して語られているのです。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。」すべての人は、神の前で口をつぐみます。ですから、女に対してさばきを下さる者は

いなくなるのです。

そこで、ただ一人、罪に定め、私たちを裁くことのできる方がいます。罪なき方キリストです。罪がないので、この方が姦淫の女を罪に定めることができます。「5:22 父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子に委ねられました。」イエス様こそが、姦淫の罪と罪として断じて、彼女を裁くことができたのです。ところが、「わたしもあなたにさばきを下さない。」と言われました。裁くことのできる力があるのに、敢えてその権威を用いない、ということです。「3:17 神が御子を遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」そこに神の憐れみがあります、恵みがあります。私たちが神の恵みを知る時、それは、自分自身が全く、神の前で裁かれて仕方がない身なのだということを知り、それにもかかわらず自分が生かされ、生かされているだけでなく、祝福されていることに対して、恐れを抱き、深い感謝の念に打たれる。これが神の恵みに触れた者の姿です。

見てください、女はイエス様を、「はい、主よ。」と言っています。彼女は、パリサイ人や律法学者に引きずりだされた時に、彼らに悪態をついていたかもしれません。けれども、イエス様がそこにおられ、語られ、そこにある真実を見た時に、彼女の心が変わられたのです。「主よ」と呼んでいます。ここが恵みの力です。人は、主の慈しみ深さ、その愛に触れて変えられます。律法によっては、ますます自分の罪深さが分かるのみです。それで自分を正しくすることはできないのです。ただ、神の一方的な恵みによってのみ、私たちは自分というものを確立することができます。ただ神の恵みによってのみ、神の前で義と認められるのです。主による慈しみを知って、それで人は変えられ、罪から離れて、義を選び取ることができます。

恵みはまた、「留まる」ことを教えます。イエス様は女に、「行きなさい。これからは、決して罪を犯してはなりません。」と言われます。主は彼女に憐れみを示されました。だからこそ、彼女がその主のすばらしさに触れて、他の男のところに行って寝るのではなく、自分の夫のところに戻るよう促しておられるのです。神の愛に触れられたら、神の愛の中に留まるのです。つまり、罪からは離れています。神の恵みにいるからこそ、罪から離れ、新しい歩みの中にいます。

恵みなのか、それとも、律法なのか？ではないのです。神の命令、神の掟を敬えばそれだけ、神の恵みの中でヘリくだりが与えられます。